

〔第十二回春陽展 展評〕

『都新聞』 昭和九年五月一日、二日

## 春の洋画界散歩 (一) 美術の上野であらしめよ

中村研一

中村研一(なかむら けんいち 一八九五年(明治二十八年)―一九六七年(昭和四十二年) 福岡県宗像市出身、東京美術学校西洋画科を卒業したのちフランス留学を経て、帰国後は帝展で受賞を重ね、戦後の日展に至るまで、昭和期官展洋画の中心的存在として活躍。正確なデッサンと端正な筆致で造形的に構築された大画面作品を得意とし、作家として全盛期を迎えた時期の戦争画は中村の真骨頂として評価されている。  
日本芸術院会員。

或る日、それは残りの花が上野にちらつき、私は皇太后陛下の博物館行啓をおろがんだのである。私達美術人は、この上野という所はなつかしい所である。秋来れば数万の人々が帝展におし寄せて呉れるのであるし、帰りには博物館で心を鎮めることも出来、子供連れの人は動物園に入つて心を楽しませることも出来るのである。春になれば花が咲き……そして春の展覧会には、思ふ様に人がおし寄せて呉れない。……そこで美術人は入場者の少ないのに頭をなやます。美術館を日比谷かどこか、もつと便利な所にもつて行つたらなぞと、あつちこつちで云ひ出す。どうも宝塚や松竹の

レビュー興行と間違へてはいけない。 (＊おろがんだは折れ押む)

私にはせると、そうまで展覧会を無理にやつて行かなければならぬといふ法はなさそうだ。事実私など一枚の絵も展覧会で売つたことは無いのであるし、私にはせると、そうまでして展覧会の方が世の中に迎合する必要も無からうではないか。どうせ歩いて来るのだから、その人々に面白ければ必ず来る。今でもお花の展覧会やお習字の展覧会には、令嬢、令息、父母、つまり一家総出のおすな／＼の盛況をやつて居るでは無いか。つまりらぬ対面や、新聞記事をにぎわす仲間喧嘩が能で、そして民衆に不可解な我々の社界と縁遠い絵を、いかにならべた所で見物は来る気づかひはないのである。これを日比谷にもつて行つても、木挽町にもつて行つても、人は来る筈はないのであるから。上野はいつ迄も上野であらしめよ。美術の見た人は上野に来るがいい。そのかはり来てくれる人は必ず美術を見に来て呉れる人で、決してふら／＼通りがかりに来るのでは無い。だから少ないとつぶやく前に、少なれば少ないだけ真の美術愛好者が来て呉れて居るのであることを知るべきである。

「真の愛好者なら例へ一人にても」とか「後世に知己を求む」云々は諸君のお題目ではなかつたか? その一人よがりの展覧会に、見物が来ないのは当り前のこと。それをつまらながつて、美術館日比谷移動説などちと蟲がよすぎる様にも思ふ。

美術館の生みの親・佐藤氏(＊)がああ百万円を出して呉れて今の美術館が出来たのである。私はあの階段の下の仏壇の様な所にとちこめられて居

る佐藤氏の銅像を見る時、どうしてもこれでは済まなくはないか？ といふ気がしてならない。まして彫刻室だけに、大展覽会になると檜の植木か何かで隠してしまつて居るなど、最も失礼なことではなからうか。私にいはせれば、あの銅像は階段の上の澗を背にして安置せらるべきもので、台座にちゃんと美術館寄贈のことが一目でわかる様にして、すべての人に見ゆるようにするのがすくなくとも礼儀の如く思はれる。

その当否は別として、ここは見物に不便だからこれを近代美術館に変更して展覽会場はどこか便利な所に、など考へずに、どこか上野の池内適当な所に近代美術館を建てて、展覽会場は今のままにつづけて行くのが佐藤氏への礼の様な気がする。尤もその辺はどうでもいいが佐藤氏の胸像だけはもつと表面にもつて来たいものである。展覽会毎に「これは我々の会の彫刻ではないといふ思はせ」に、樹木でかくしたりするのはちつと襟度がなさすぎはしないか。

美術館に人が来ないことは別の意味で慶賀してもいいことかも知れない。それは真の美術愛好家のみが来てくれるから。

私は思ふ、ここで若しコロカドームか、ドラクロアの遺作展をやつたら、いかに上野が不便でも、一日数千人の観客はあるにちがひなからう。

『都新聞』 昭和九年五月一日

\*北九州の石炭商・佐藤慶太郎が建設資金の全額百万円(現在の四十億円相当)を東京府に寄付した。石炭商として決して大手ではない佐藤は、

アメリカの実業家カーネギーに倣い、全財産の半分を社会のために使つた。一九二六年(大正十五年)五月一日、東京府美術館は開館。官展から在野の美術団体を問わず、芸術家の発表の場となる。



笠木實氏撮影写真

## 春の洋画界散歩 (二) 壺中山水ありの春陽会

中村 研一

春陽展を見物に行くと、目録と共に『春陽会雑報』といふパンフレットを頂戴する。これは甚だしい思ひつきで、私は帰りの電車の中ではほほ笑み乍ら、この仲のいい一団の画家が仲よくをさまつて居るその知り合ひの画家達の写真を見ては、各会員が書いて居るお互いの記事を読みふけたのである。これを小にしてはこのパンフレットであるが、今日画界に一分野を成してゐる春陽会を、大きく見ればやはりこの手でやつて居るのである。会員の出入があつて後、(石井)鶴三氏の所謂胆いぢゆるの定つた所であらう。尤もこうなつたら胆は定らざるを得ない。しかしそれを外から見ると胆の定つたといふ壺にはまつて居るのである。この壺中に居る時、天下安泰だが、外が見えない危険がある。壺中山水ありなどといふ図は昔から、大てい自己陶醉の別の云ひ方でしかなかつた。私はこの仲のよい美しさは充分買ふが、しかし同時に例へば貴塵館は筆やかましい男故、めんどうだからあまり他の人が筆をつけない。そうつとして置くとか、まあお座なりに賞めて置くといつた形、それでよもやいい気にはなつて居まいが、しかし壺中山水ありなどの手があるので……、春陽会に危あやぶむはこの辺なので。中では倉田老の山本鼎子いしましを戒むは中々よかつた。私も、鼎子に時間をあげたいことを念願すること倉田老に後れない一人である。

閑話休題——ここで森田恒友氏の懐古展(遺作室特設)をやつて居る。

去年は洋画界にも不幸がよくあつた。光風会では松下春雄君の遺作展をやつた。若い未亡人と三人のがんぜ無い遺子を見、そして残つたものとして画室の中の売り残りの絵と、絵の具類で他に何も無い。まったく若くして逝つた画家の死ほど悲しいものが世にあらうか。光風会が彼の遺作展を開いて、今一度世間に彼の作全体を見てもらひ、又会員が出来るだけ奔走して、いくらかでも未亡人を助け得たことはよいことであつた。

森田氏の場合は、よく世に知られた人であつたけれど、世には偏見もあるし悪意もあるし悪意も無いとは云へない。それを故人になつてその嫉妬の対象の無くなつた今日、公平に今一度見なほさせることは、友人の当然の義務といはなければならぬ。隠れたる才能を以つて世に認められないといふ作家は、今の日本の、新人を血まなこになつてさがし求めてゐる時代に、あり得やうとは思はないが、しかし正当で無く評価されて居ることはあり得るのである。それをその死後、本人の居ない所で、たればかず公平に評価せしめ、若し不当に評価されて来た人があつたら、今一度、正當に評価せしめる機会を作らせることは友人の当然の義務でなからねばならない。よく展覧会で見ることだが死んだ出品人の一、二点の作の上に、黒リボンをかけて、もう生きてる人でないので絵も大したこと無しとて、奥の方の室などにほおつて置くのもあるが、出来るならどうかして、一室なり又は一角二壁面なりに、充分に陳列したいものである。文壇で友人が編輯責任を取つて遺作文集などを出すのと同じことである。その為、生者

が多少の迷惑はしのぶべきであらう。

私はいつぞや、サロン・ドウトンヌの大会で会長フランツ・ジュルダンが声をはげまし、「諸君に愛する妻無きか？ 子無きか？ 今一度展観して世に認めしめる機会をつくり、すこしでもその遺族の生活のお役に立つが友人の務めと思はざるか……これは全く我々自身のことをいつてゐるのだ」と叫んだのを思ひ出す。

全く絵描きには遺産としては作品より他に無く、退職金も一時金も恩給も版權も手当も養老院も無いのである。たま／＼数万金に作品がその死後売らるることあるも、作者生前それにて得たる金を思へば、絵描き位つぶやきのすくない人々は無いのである。

〔都新聞〕 昭和九年五月二日